

講演会『戦国期における厳島社の造営―大願寺道本の活動―』を聴いて

2026.4.28 作成 森

2月18日に宮島etto交流館で首記題名の講演会が開催されたので、興味本位で参加してきました。話についていけず、理解が追いついていけない所が多々あり、消化不良状態でした。誤解した部分もあるかと思いますが、脈絡なく一部だけご紹介します。

開催日時：2月18日（水）14時30分～16時

開催場所：宮島etto交流館（参加者108人 募集50人だったが）

演 題：「戦国期における厳島社の造営―大願寺道本の活動―」

講 師：県立広島大学宮島学センター 特任講師 大知 徳子 氏

I. 講演内容

1. はじめに

- ・大願寺は真言宗の寺院で建仁年間（1201～1204）僧了海によって再興された。
- ・長享2年（1488年）に火災で焼失した厳島社の西回廊を「本願伊予大願寺覚尊」が復元したとされる。（中近世においては「本願」として修理造営を担う寺院であった。）
*厳島社は建永2年（1207）と貞応2年（1223）の二度の火災で焼失している。
- ・「本願」とは、もともと「本来の誓願」の意であるが、戦国期には「自分の費用で寺を建立するとか創建する事とか、それをする人」の意で用いられた。また、「ある寺を建立した第一の長老、または、その人に代わって管理する後継者」の意でも用いられた。
室町幕府や朝廷による保護が衰退したことにより、地域において寺社造営勧進を行う存在として中世後期に出現した。
- ・「本願」と類似する言葉として「勧進」があるが、「勧進」は「宗教的な慈善事業のために寄付を募ること」で、「諸国を勧進する＝寄付を募りながら全国を歩き回る」といった用いられ方をする。
- ・中世後期以前の社寺の体制は①神主、②社家三方（寺社の実務をつかさどる供僧、社家：修理部門を持っていた、内侍など）③神領衆（各地に散らばっている神社の領地の管理）からなっており、神主は鎌倉時代には鎌倉や京都に在住し、朝廷や幕府の援助により神主家の責任において修理・造営が実施できる体制にあった。

2. 厳島における勧進僧・本願の需要

《厳島社の神主》

- ・平家の繁栄時代から鎌倉幕府の時代には、佐伯氏が神主家であったが、承久3年（1221年）の承久の乱で神主職は鎌倉幕府御家人の藤原親実に移った。以降、天文10年（1541年）まで約300年藤原家が神主職を世襲した。（藤原神主家）
- ・永生5年（1508年）神主藤原興親は後継者がいないまま京都で急死し、永生15年（1518）まで後継者が定まらず「神主の不在期間」（1508～1518）となった。この時、大内氏や尼子氏を巻き込みながら、厳島の支配権をめぐる争いが続いた。
- ・天文10年（1541）に大内義隆に藤原神主家は滅ぼされ、天文10年から天文20年まで大内義隆が厳島を支配した。

《厳島における本願の需要》

- 南北朝乱戦期以降、国家・国衙体制の衰退の影響を受け、厳島社でも神領の支配体制が崩れ始め、造営・修理事業は困難となってきた。社寺の建造物の損傷からの回復（修繕・再興）など応急的な処置が必要な際に、「臨時的」に地域に赴き社寺の祭神や本地仏のご利益を説いて、勧進を行い、懇志を集めて寺社修復のための費用を調達した。
- 宮島における勧進聖・勧進沙門（勧進僧）、本願の出現
 - ① 永和2年（1376）：弥山守護寺（大日堂）/勧進聖金剛佛師宥妙
 - ② 長享2年（1488）厳島社の西回路/本願伊予大願寺覚尊
 - ③ 永享年間（1429～1441）厳島社の客人社/京都南禅寺の惟肖徳厳、惣政所野坂佐渡守
 - ④ 永正9年（1512）多宝塔（再興）/周歆（禅宗僧、多宝塔造営の本願も名乗る）

3. 「厳島社本願」道本（大願寺住職）の出現

- 「神主の不在期間」（1508～1518）において、厳島で活動する勧進僧を統率し、社寺の修理・造営を行っていた道本に対し、永生17年（1518）に大内義興が直属であった職人集団の帰属を認めた。
- 道本による修理・造営事業
 - ① 永生9年（1512）～大永3年（1523）：「多宝塔」再興
 - ② 永生13年（1516）：「本社三棟」（厳島社の本社拝殿）修理
 - ③ 永生15年（1518）：「客人御前三棟」（厳島社の客人社拝殿）修理
 - ④ 永生16年（1519）：「弥山守護寺」（大日堂）再興
 - ⑤ 大永3年（1523）：「大元神社本殿」再興
 - ⑥ 天文2年（1533）：「五重塔九輪」再興
 - ⑦ 天文9年（1540）：「外宮宝殿」再興
 - ⑧ 天文11年（1542）：「厳島社神前大鐘」（鐘楼）造営
 - ⑨ 天文11年（1542）：「輪蔵」（経蔵）造営（長門日普光王寺から移設）
- 永生17年（1520）「三十六歌仙之図」奉納（願主：大願寺道本、絵：土佐光信、書：三条西実隆）明治期まで客人社祓殿にかけられていた。
- *参考：永生12年（1515）には「三十六歌仙之図」が奉納（願主：堺南北諸商人、絵：狩野元信、書：山崎宗鑑）昭和初期まで本社祓殿にかけられていた。
- 天文11年（1542）11月7日：道本没

4. 森の感想

- 元々は、神領地からの収入と朝廷や幕府の援助で社寺の運営、造営・修理など行っていたものが、どちらも当てにできない時代が到来し、社寺本体の自助努力で行わないといけなくなった時に、地域の豪族（大名）や各地を回っての勧進で運営、造営・修理することを進めた「本道」のような精力的な経営者がいたことが繁栄につながったと思うと、すごい人がいたなと感心する。
- 大知先生のように、過去の資料が少ない中で、いくつかの資料をつなげて（ほぼ漢字ばかりの資料を読み解いて）史実を紐解いていく作業は、根気のいる大変な作業だと思った。つながった時（つながりを発見した時）の思いは、感慨ひとしおだと思うが。

以上